



ミャンマー人ガラボーター

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL: 086-224-0102
FAX: 086-221-2554
URL: http://www.mjcp.or.jp

人々の、心の中の声は聞こえました

3年ぶりの
ミャンマー訪問

協会理事長
岡田 茂



歓迎会の後、全員で記念撮影。2列目の中央が岡田理事長

コロナ禍と、国軍によるクーデター後の混乱で、私たち協会のミャンマーでの現地活動はままならず、重苦しい日々が続いた。やっと今年になってコロナに対する規制は緩和、観光ビザ発行も再開されたので、2月初めに訪問することができた。

のハードな日程の旅だった。燃油サーチャージは4万円以上、航空運賃の合計はこれまでの2倍を超す20万円以上となっており、最近の物価高騰をここでも実感させられた。

岡山大学に留学したり研修を受けた医師ら25人で、歓迎会はまるでミニ同窓会の様相。一人ひとり話が弾むが、全員で同時に話ができないのが歯がゆい感じ。遠くはマンダレーからも駆けつけてくれた人もいた。岡山で飲み友達だった仲間もおり、豊田夫妻も感無量の面持ちだった。

懐かしい顔 再会約す

みんなは一堂に会えたということの感激が大きく、政変のことも忘れたように大声で話はずすんだが、中には声を潜めて積もる話を漏らす人もいた。懐かしい会話はこの後に続く昼食の間も絶えることがなく、記念撮影後の午後2時、再会を約して解散した。

また豊田夫妻が計画している秋の車いす寄付の件などの打ち合わせをした。

受け入れについて、大使は支援を約束してくれた。

翌日は、はや帰国だ。私たちは丸山市郎・駐ミャンマー日本大使から公邸での昼食会に招待された。参事官や書記官も同席、昔の思い出から今のミャンマー情勢まで、会話は弾んだ。不服従運動でタイに逃れている医科大学卒業生の岡山大学への

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

懐かしい顔 再会約す

味わえず

岡山大の研究員に 田中奨学金 4人目



協会の「田中医療奨学金」の受給者に、岡山大学薬理学教室の研究員モツヅアユエさん(26) 写真IIが選ばれた。ヤンゴン第一医科大学卒。政

情混乱のなかタイへ出国、落ち着いて研究ができる機会を待っていた。その情報が入った協会は奨学金と宿舎を準備した。2月に来日したモツヅアユエさんは「協会をはじめ、研究の場所を与えて下さった薬理学の細野祥之教授やビザの取得の手続きをしてくれた教室員に感謝しています」と話す。

奨学金は故田中茂人理事の寄付でつくりられ、支給は4人目。

2泊4日の強行日程

タイ航空のバンコク乗り継ぎ往復深夜便を利用した2泊4日

翌日午前10時に再びMAJJA事務所へ。車から降りるとすでに懐かしい顔が勢ぞろい。かつ建設の場所などの詳細をつめ、

懐かしい顔 再会約す

懐かしい顔 再会約す

懐かしい顔 再会約す

学生交換や共同研究 加計学園とMAJJAが協定

岡山理科大学、倉敷芸術大学などを設置する学校法人加計学園とミャンマーの元日本留学生協会(MAJJA)が連携協定を結んだ。3月11日、同理科大で加計孝太郎理事長と、来日したミヨ

協定書によると、双方は研究者、学生の交換や語学学習、文化交流、共同研究などを推進。これらの活動を互いにサポートするため情報交換を行う。

理事の石川さん死去

元東大医学部長

協会理事の東京大学名誉

教授石川隆俊さんが2月3日死去。83歳だった。がん研究所(東京)を経て東大医学部教授、医学部長を務めた。1996年に当時、岡山大学教授だった岡田茂・協会理事長らと肝臓がんの研究のためミャンマーへ。その後も数回訪れている。2006年の協会発足のとき理事に就任した。



MAJJA新会館の完成予想図。赤い矢印の3階が田中ホール

社会福祉法人旭川荘(岡山市) 小幡 篤志 企画広報室長

母国で活躍できる介護福祉士養成



旭川荘内で留学生らと歓談。右端は筆者(岡山市中区)

日本はすでに超高齢社会ですが、経済発展が進むミャンマーもいづれ高齢化を迎えるでしょう。そのような時代を見据えて、障害者や高齢者の総合医療福祉施設を運営している「旭川荘」では2017年から、日本の「介護福祉士」国家資格を得て将来、母国で活躍することを目指すミャンマー人留学生を受け入れています。これまでに8人が資格を取得し、現在も5人が在学して勉強しています。

日本人と同等に処遇

旭川荘の故江草安彦前理事長はかねてよりアジア各国との交流を積極的に進めました。ミャンマーからも保健大臣夫人が視察にみえたほか、岡山大学に留学している看護師が研修に訪れるなど、交流をしてきました。私がアジア交流の担当になった16年、協会の岡田茂理事長からミャンマーの高齢化に備えて介護人材の育成をしたいという

話がきました。重い障害者や高齢者のケアに深く関わってきた旭川荘としては、技能実習生ではなく「介護福祉士」、すなわち専門職の養成という形で貢献できないかと考えました。当時はまだ日本政府が介護ビザを認めていなかったため、手探りでスタート。技能実習生が雇用主からひどい扱いを受けている報道を見ていたので、我々は留学生を日本人と同等に処遇し、全国に誇れる留学制度を作ろうと決意しました。

留学候補者は、岡田理事長とミャンマー国民健康財団のタンセイン理事長が保健省や病院の関係者の協力を得て探してくださり、私と施設長が現地に出かけて面接しました。ミャンマーの人たちは純粋で勉強熱心です。また仏教の影響からか「お年寄りのお世話をするのは当たり前」という奉仕の精神を持ち合わせた人が多い印象でした。受け入れに当たっては、半年間の日本語学校(岡山外語学院)と2年間の介護の専門学校(旭川荘厚生専門学校)に通学するルートを作りました。また、旭川荘のアジア交流のための基金を原資として、奨学金制度を設けました。学費はすべて旭川荘が貸与し、資格取得後に一定期間勤務することで返還を免除する仕組みです。厚生労働省や岡山県庁にも奨学金の必要性を訴え、現在では公的な奨学金も活用できるようになりました。1期生2名がやってきたのは17年10月。寮の個室を用意したところ、入国直前に「オバケが怖いから2人1緒の部屋がいい」と言われて慌てふためいたことに始まって、すべては試行錯誤で生活基盤を作っていました。協会からも生活費の支援をいただき、また旭川荘職員からもカンパをしてもらい助かりました。施設でのアルバイトについてはどう対応してよいか最初は戸惑いましたが、皆さん3か月もするとすっかり人気者です。勉強の面では、半年間は専門用語の習得にかなり苦労しますが、慣れてくると成績も伸びました。2期生は2名、3期生は4名、4期生は政情不安とコロナ禍のため新規入国はできませんでしたが、日本国内で転学してきた学生が1名、5期は入国規制が緩和され再びミャンマーから1名、6期生は2名、今年7期の2名の来日を予定しています。

頑張る姿に刺激を受ける

1期生が資格を取得して就職してから3年が経過します。さらなる資格取得を目指して勉強を始めたり、結婚して子育てしながら勤務したりと、それぞれのスタイルで日本人顔負けの勤め方で頑張る姿には、私や周りの職員も大いに刺激を受けています。将来の夢を聞くと、「ミャンマーに帰って学生たちを教えた」「自分の故郷に老人ホームを作りたい」などと口々に語ってくれます。

日本とミャンマーの懸け橋となる専門職員を養成できるよいう、これからの取り組みを続けていきたいと思っています。

ミャンマー海外留学事情

海外めざす若者増える 渡航先の一番人気は日本

岡山大学日本留学情報センター

鳥越 麻美 留学コーディネーター

岡山大学とミャンマーとの間には、医学交流活動の長い歴史があります。その実績などが評価されて、岡山大学は2014年、ミャンマーから日本に留学する学生の受け入れ促進と調整に当たる文部科学省の「留学コーディネーター」配置事業を受託。また19年には「日本留学海外拠点連携推進事業(東南アジア)」も託されました。

私はヤンゴンとマンダレーにある日本留学情報センターの事務所で、現地人スタッフらとともに日本留学情報の提供を行っています。外国語大学でビルマ語を学んだ経験から将来はミャンマーの発展に貢献したいと思っていただけに、この仕事はやりがいがあります。

岡山大では現在、ミャンマーからの留学生が30名ほど在籍しており、日本の大学で5番目の多さです。もともと医学部への留学が多かったのは、協会の岡田茂理事長や小出典男副理事長が教授時代にミャンマーから医師らを研修に招いたのが礎になっています。近年は医学分野のみならず、工学、理学、人文社会分野などへの留学生も増えています。

ミャンマーでは21年2月に発生した国軍のクーデターによる国内情勢の変化の中、海外で教育を受けたいという若者が増えていいます。昔から馴染みのある日本は地理的・文化的・経済的な理由と、学校や奨学金情報が手に入りやすいこと、それに在日ミャンマー人ネットワークも確立していることから留学しやすく、21年のユネスコ(国連教育科学文化機関)のデータによると、ミャンマーからの海外留学先として日本が一番多くなっています。

私たちが事務所で留学相談者も激増しています。18年度に月間40名程度だったのが、21年度から月100名程度に。22年度の進路追跡調査によると、返答があった相談者約90名が高等教育機関へ出願し、このうち6割が合格しています。

ミャンマーの学生にとって経済的な問題のほか、出願のための語学力・学力が日本留学の障壁となつていいます。特に理系学部留学を目指す学生にとつて、高校までの理系科目の学習範囲が両国で異なり、その学力ギャップを支援する教育が必要となつています。

留学以上に日本へ就業を求める若者も激増しています。22年12月に実施された日本語能力試験は5万人が受験、世界の中でも日本語学習者が最も多い国の一つです。

日本での留学と就職を経験し、自身のキャリアを築いて成長したミャンマーの若者は将来、国際人として日本とミャンマーを繋ぐ架け橋になるに違いありません。岡山大の取り組みが、そのような人材育成に寄与できることを望んでいます。



マンダレー医科大学への訪問。右側が筆者

編集後記

2月に亡くなられた協会理事の石川隆俊・東京大学名誉教授はとにかく多才でした。がん発生のメカニズム解明をテーマにした研究者としての実績、あるいは医学部長としてのリーダーシップ。定年後は米国に渡って名門音楽院でヴァイオリンを学び、のちに「ヴァイオリン演奏のための脳神経の使い方」という題の本を出しました。著書はほかにも「なぜヒトだけがいくつになっても異性を求めるのか」などがあります▼石川さんはまた趣味の多い人でした。その一つが大道芸「ガマの油売り」の口上。筑波山ろくに通って習った、いわば本場仕込みです。「サーサー、お立合い、御用とお急ぎでない方はゆっくり聞いておいで…」と始まって、口上は延々と続く。そのさわりの部分だけでも一度聞いたみたいと思しながら、その機会がなかったのが悔やまれます。ご冥福をお祈りします。(西崎)